

対談

～福祉教育をうけて～



事務局長 馬場 徹

中村 希望

事務局長 馬場徹(左)

平成4年 大野城市社会福祉協議会入職
地域福祉・在宅福祉等を担当。令和3年4月より事務局長。

中村 希望(右)

平成21年 大利小学校卒。福祉系大学卒業後、医療機関にてMSWとして従事。令和3年1月大野城市社会福祉協議会入職。

社協は市内の小学校を対象に福祉教育を行っているのですが、中村さんは実は小学校4年生のときに社協の福祉教育を受けたご経験があるそうなので、今日はいろんな話を聞いてみたいと思います。

福祉教育を受けて

馬場事務局長

小学校4年生のとき、福祉教育を受けたことは覚えていますか？

中村さん

車いすの体験や、アイマスクをしてお友だちとペアになって、校内の階段を上り下りしたのを覚えています。実際にアイマスク体験をしたことがなかったので、障がいを持っている人はこんなに生活が大変なんだなっていうのをお友だちと話した記憶があります。私たちが普段生活している中で気づかない部分の障がいというか大変さ、例えば階段の上り下りだけでなくお手洗いもそうですし、駅の案内のアナウンスが流れているのを耳が不自由な方は聞こえないから大変なんだろうなっていうのをそのとき教育を受けて感じました。

馬場事務局長

福祉教育を受けたことで、障がいを持っている人を意識するようになったということですか？小学生ながらすごいですね。社協が福祉教育をする上で注意しなければいけないのは、こういうことができる、こ

ういう声掛けをすれば車いすの人も、目の不自由な人も安心して歩くことができるというプラスの面も教えていく必要があるということです。子どもたちにマイナスのイメージだけで終わらせないというのが社協が福祉教育を行う目的、意義でもあるし、誤った伝え方をしないように気を付けています。

福祉教育のおかげ…？



馬場事務局長

中村さんは、なぜ社協に入ろうと思ったんですか？

中村さん

今までは病院に勤めていたんですが、病院は患者さんが地域で暮らすにあたってどんなふうにしたら生活しやすいかなというところを主に支援していると思うんですけど、社協はその地域の方と住んでいる地域の問題点とかを実際に話し合ったりして、地域を住みやすいまちにつくりあげていくというところが違い、そこに興味を持ったので社協に入りました。

馬場事務局長

なるほど、ということは社協がどんな仕事をしているのかは入る前からわかってたんですか？

中村さん

大学が福祉系の大学だったので、授業を受けて社協が何をやっているかは知っていました。

馬場事務局長

じゃあ福祉の大学に行っていたということは、中村さんは福祉の資格を持っていますか？

中村さん

はい。社会福祉士と精神保健福祉士を持っています。

馬場事務局長

それらの資格が役に立ったなということはあるですか？



中村さん

まだ社会に出て経験年数が浅いので、あまり仕事においては実感したことはないと思いますが、制度とかが多少はわかるので、身内とかに聞かれたときは答えることのできる範囲で教えることができるのは役に立ったかなと思います。

馬場事務局長

社協にはいろんな人が来ますよね、当事

者はもちろん障がいがある方も来ますし、でもその人に合った対応ができています。窓口業務を見ていて思います。これも福祉教育のおかげかな？それは関係ないかな？笑

中村さん

ちょっと関係あるかもしれないです笑

勇気を出して声かけを

馬場事務局長

社協に入る前までは病院に勤務していたのですが、社協に入って中村さん自身変わったことってありますか？

中村さん

個人的なことですが、今まで地域に住んでいる人、近所に住んでいる人とは顔を合わせたことはあってもあまり関りがなかったんです。でも施設を利用されている方とか、ボランティアの方とかと関わることによって地域で活動されている方の力になれているのかな、貢献できているのかな、と少し思います。前よりつながりが持てるようになったと言ったらわかりやすいかな。

馬場事務局長

それはいいですね。

今小学生に、もし福祉の職場に入るならこんなこととしてほしいなっていうことはありますか？

中村さん

少なからず地域の、地域だけじゃないで

すけど、困っている人とかいたら助けたいなという気持ちは昔からありました。私は福祉教育をとおして、私たちが普通に暮らしているのは当たり前なことじゃないと思ったので、習ったときの気持ちを忘れずにいてほしいなと思います。

馬場事務局長

なるほど。じゃあ地域の中で実際に障がいを持った人たちに出会うことがあったら、子どもたちにどういうふうにしてほしいと思いますか？

中村さん

まずは困ってそうな感じだったら声かけとかをしてほしいなと思います。

馬場事務局長

声かけね、一番大事なことです。最初の一言は勇気がいりますよね。そこを思い切って頑張って声をかけてほしいということね。

馬場事務局長

中村さんみたいに福祉教育を受けてそのまま直接福祉の職場というつながりではないかもしれないけど、いろんな障がいを持った人たちの理解をこれから子どもたちにも深めていってもらいたいし、その子どもたちがどんどん増えていったら大野城市は誰もが住みよいまちになるんじゃないかなと思っております。中村さんみたいな福祉の職場で働く若い世代の方、募集しています！